

唐模様

泉鏡花作

麗姫

惟おもふに、描さがける美人びじんは、活いける醜女しうぢよよりも可かなり也。
傳つたへ聞きく、漢かんの武帝ぶていの宮人きうじん麗娟りけん、年としはじめて十四。
玉たまの膚はだ艶つややかにして皓しろく、且かつ澤うみふ。たきもしめざ
る蘭麝らんじやおのづから薰かをりて、其その行ゆくや峽蝶けふてふあひと相飛あひべり。
蒲柳ほりうせんじやく纖弱せんじやく、羅綺らきにだも勝たへ難がたし。麗娟りけん常に身みの何處いづく
にも瓔珞えいらくを挂かくるを好このまず。これ袂たもとを拂はらふに當あたりて、
其その柔ちよひかなる膚はだに珠たまの觸ふれて、痕あとを留とどめむことを恐おそ
れてなり。知しるべし、今いまの世よに徒いたづらに指環ゆびわの多おほきを欲ほつ
すると、聊いさか其その抱負ほうふを異ことにするものあることを。

麗娟りけん宮中きうちゆうに歌うたふ時ときは、當代たうだいの才人さいじん李延年りえんねんありて是これ
に和わす。かの長生殿ちやうせいいでん裡り日月じつげつのおそき處ところ、ともに廻風くわいふう
の曲きよくを唱なするに當あたりてや、庭前ていぜん颯さつと風興かぜおこり、花はなひら
／＼と翻ひるがへること、恰あたかも罪々ひゝとして雪ゆきの散ちるが如ごとくな
りしとぞ。

此の姫また毎に琥珀を以て佩として、襲衣の裡に
人知れず包みて繋む。立居其の度になやかなる玉
の骨、一つ／＼琴の絲の如く微妙の響を作して、聞
くものの血を刺し、肉を碎かしめき。

女子粧はゞ寧ろ恁の如きを以て會心の事とせん。
美顔術に到りては抑々末也。

勇將

勇將も傑僧も亦同じ。むかし行簡禪師は天台智大師の徒弟たり。或時、群盜に遇うて首を斬らる。禪師、斬られたる其の首を我手に張子の面の如く捧げて、チヨンと、わけもなしに項のよき處に乗せて、

見よ、頭なき其の骸、金鎧一縮して戟を横へ、片手を擧げつゝ馬に跨り、砂煙を拂つてトツ／＼と陣に還る。陣中豈驚かざらんや。頭あるもの腰を抜かして、べた／＼と成つて三目して之を見れば、頭なき將軍の胸、吃然として馬上にあり。胸の中より聲を放つて、叫んで曰く、無念なり、戦利あらず、敵のために傷はれぬ。やあ、方々、吾が頭あると頭なきと何れが佳きや。時に賈雍が従卒、おい／＼と泣いて告して曰く、頭あるこそ佳く候へ。言ふに従うて、將軍の屍血を噴いて馬より墜つ。

勇將も傑僧も亦同じ。むかし行簡禪師は天台智大師の徒弟たり。或時、群盜に遇うて首を斬らる。禪師、斬られたる其の首を我手に張子の面の如く捧げて、チヨンと、わけもなしに項のよき處に乗せて、

大手を擴げ、逃ぐる數十の賊を追うて健なること驚
の如し。尋で瘡癒えて死せずと云ふ。壮なる哉、
人々。

愁粧

むかし采采の武帝の女、壽陽麗姬、庭園を歩する
時梅の花散りて一片其の顔に懸る。其の倂また較ふ
べきものなかりしより、當時の官女皆争つて輕粉を
以て顔に白梅の花を描く、稱して梅花粧と云ふ。

隋の文帝の宮中には、桃花の粧あり。其の趣相似
たるもの也。皆色を街ひ寵を售りて、君が意を傾け
んとする所以、敢て歎美すべきにあらずと雖も、然
れども其の志や可憐也。

司馬相如が妻、卓文君は、眉を畫きて翠なること
恰も遠山の霞める如し、名づけて遠山の眉と云ふ。
魏の武帝の宮人は眉を調ふるに青黛を以つてす、い
づれも粧ふに不可とせず。然るに南方の文帝、元嘉
の年中、京洛の婦女子、皆悉く愁眉、泣粧、墮馬髻、
折要歩、齟齬笑をなし、貴賤、尊卑、互に其の及ば
ざるを恥とせり。愁眉は即ち眉を作ること町内の若
旦那の如く、細く削りつけて、曲り且つ疎むを云ふ。
泣粧は目の下にのみ薄く白粉を塗り一刷して、ぐい

と拭ぬぐひ置おく。其その状さま涙なみだにうるむが如ごとし。墮だ馬ば髻きつのも
のたるや、がつくり島田しまだと云いふに同おなじ。案あんずるに、
潰つぶと云いひ、藝げい子こと云いひ投なげと云いひ、奴やつこはた文ぶん金きん、我わが
島田しまだ髻まげのがつくりと成なるは、非ひ常じやうの時ときのみ。然しかるを、
元嘉げんか、京洛きやうらくの貴婦人きふじん、才媛さいえんは、平へい時じに件くだんの墮馬髻だばきつを
結ゆふ。たとへば髻まげを片潰かたつぶして靡なびけ作りて馬うまより墮おち
て髻もとの横よこ状さまに崩くづれたる也なり。折せつ要えう歩ほは、密そつと拔ぬき足あしする
が如ごとく、歩あゆ行むに故わざと惱なやむを云いふ、雜ざつと癩しやく持もちの姿すがたなり。
齟齬うしせう實おもは思おもはせぶりにて、微ほ笑ゝむ時とき每とき常つねに齟齬むしばの痛いた
みに弱よわ々と打うち鬢ひそむ色いろを交まじへたるを云いふ。これなん當たう
時じの國こく色しよく、大將軍たいしやうぐん梁れう冀きが妻つま、孫そん壽じゆ夫人ふじん一りう流りうの媚び態たいよ
り出いで、天てん下かに洽あまねく、狭けん土ど邊へん鄙びに及およびたる也なり。未いま
だ幾いくほどもあらざりき、天てん下か大おほに亂みだれて、敵てき軍ぐん京けい師し
に殺さつ倒たうし、先まづ婦ふ女ぢよ子しを捕とらへて縦ほしに凌りやう辱じよくを加くはふ。其そ
の時とき恥はぢ辱ぢと恐おそれとに弱よわきもの、聲こゑをも得えたたず、傷いた
み、悲かなし、泣なける容かたち、粧よそほはざるに愁しう眉び、泣きつ粧しやう。柳りう腰えう
鞭むちに折くじけては折せつ要えう歩ほを苦くるしみ、金きん釵さん地ちに委あしては墮だば
馬きつ髻つを顯けん實じつす。聊いさも其その平ふだん常じやうの化けし粧しやうと違たがふことなか
りしとぞ。今いまの世よの庇ひさ髻しがみ、あおひたた、顔かほに亂みだれたる
を鬢びんのほつれは如いかに何はた、果はたしてこれ何なんの兆てうをなすもの
ぞ。

捷術

隋の沈光字は總持、煬帝に事へて天下第一驍捷の
達人たり。帝はじめ禪定寺を建立する時、幡を立つ
るに竿の高さ十餘丈。然るに大風忽ち起りて幡の曳
綱頂より斷れて落ちぬ。これを繋がんとするに其の
大なる旗竿を倒さずしては如何ともなし難し。これ
を倒さんは不祥なりとて、仰いで評議區々なり。沈
光これを見て笑つて曰く、仔細なしと。太綱の一端
を前齒に銜へてする／＼と竿を上りて直ちに龍頭に
至る。蒼空に人の點あり、飄々として風に吹かる。
これ尚ほ奇とするに足らず。其の綱を透し果つるや、
筋斗を打ち、翻然と飛んで、土に掌をつくると齊しく、
眞倒にひよい／＼と行くこと十餘歩にして、けろり
と留まる。觀るもの驚軟せざるはなし。寺僧と時人
と、ともに、沈光を呼んで、肉飛仙と云ふ。

後に煬帝遼東を攻むる時、梯子を造りて敵の城中
を瞰下す。高さ正に十五丈。沈光其の突端に攀ぢて
賊と戦うて十數人を斬る。城兵這奴憎きものゝ振舞
かなとて、競懸りて半ばより、梯子を折く。沈光

頂たゞきよりひつくりかへりざまに梯子はしごを控ひかへたる綱つなを握にぎ
り中空なかぞらより、一ひとたび跳返はねかへりて劍けんを揮ふるふと云いへり。そ
れ飛燕ひえんは細身さいしんにしてよく掌中しやうちうに舞まふ、絶代ぜつだいの佳人かじんた
り。沈光ちんくわうは男兒だんじのために氣きを吐はくものか。

驕奢

洛陽伽藍記に云ふ。魏の帝業を承くるや、四海
こゝに靜謐にして、王侯、公主、外戚、其の富既に
山河を竭して互に華奪驕柴を爭ひ、園を脩め宅を造
る。豊室、洞門、連房、飛閣。金銀珠玉巧を極め、
喬木高楼は家々に築き、花林曲池は戸々に穿つ。さ
るほどに桃李夏緑にして竹柏冬青く、霧芳しく風薫
る。

就中、河間王深の居邸、結構華麗、其の首たるも
のにして、然も高陽王と華を競ひ、文柏堂を造営す、
莊なること帝居徽音殿と相齊し、清水の井に玉轆轤
を置き、黄金の瓶を釣るに、練絹の五色の絲をニと
す。曰く、晉の石崇を見ずや、渠は庶子にして尚ほ
狐腋雉頭の裘あり。況や我は太魂の王家と。又迎風
館を起す。

室に、玉鳳は鈴を啣み、金龍は香を吐けり。窓に
挂くるもの列錢の青瑣鎖なり。素梨、朱李、枝撓に
して簷に入り、妓妾白碧、花を飾つて樓上に坐す。

其の宗室を會して、長夜の宴を張るに當りては、金瓶、銀二百餘を陳ね、瑪瑙の酒盞、水晶の鉢、瑠璃の椀、琥珀の皿、いづれも工の奇なる中國未だ嘗てこれあらず、皆西域より齎す處。府庫の内には蜀江の錦、呉均の綾、氷羅、氎、雪縠、越絹擧て計ふべからず。王、こゝに於て傲語して曰く、我恨らくは石崇を見ざることを、石崇も亦然らんと。

晉の石崇は字を季倫と云ふ。季倫の父石苞、位已に司徒にして、其の死せんとする時、遺産を頒ちて諸子に與ふ。たゞ石崇には一物をのこさずして云ふ。此の兒、最少なしと雖も、後に自から設得んと。果せる哉、長なりて荊州の刺史となるや、潛に海船を操り、海を行く商賈の財寶を追剥して、富を致すこと算なし。後に衛尉に拜す。室宇宏麗、後房數百人の舞妓、皆綺を飾り、金翠を珥む。

嘗て河陽の金谷に別莊を營むや、花果、草樹、異類の禽獸一としてあらざるものなし。時に武帝の舅に王鎧と云へるものあり。驕奢を石崇と相競ふ。鎧に王鎧を以て釜を塗れば、崇は蚬を以て薪とす。鎧、紫

の紗しやを伸のべて四十里しじゆりの歩障ほしやうを造つくれば、崇そうは錦にしきに代かへて是これを五十里じじゆりに張はる。武帝ぶてい其そのの舅しゅうに力ちからを添そへて、まけるなとて、珊瑚樹さんごじゆの高たか二尺じやくなるを賜たまふ。王鎧わうがいどんなものだと云いつて、是これを石崇せきそうに示しめすや、石崇せきそう一笑せつして鐵如意てつにょいを以もつて撃うつて碎くだく。王鎧わうがい大おほいに怒いかる。石崇せきそう曰いはく、恨うらむることなかれと即すなち侍僮じじゆうに命めいじて、おなじほどの珊瑚さんご六七株しちゆを出いだして償つぐひ還かへしき。

然しかれども後遂のちつひに其そのの妓ぎ、緑珠ろくじゆが事ことによりて、中書ちゆうしよ令れい孫秀そんしゆうがために害がいせらる。

河間王かかんわうが宮殿きうてんも、河陰かいはんの亂逆らんぎやくに遇あつて寺院じふんとなりぬ。唯たゞ、堂觀廊廡だうくわんらうぶ、壯麗さうれいなるが故ゆゑに、蓬萊ほうらいの仙室せんしつとして呼よばれたるのみ。歎たんずべきかな。朱荷曲池しゆかきよくちのあと、緑萍蒼苔りよくへうさうたい深く封として、寒蟄かんき唧々しやくしやくたり、螢流けいりゆう二三てん點てん。

空蝉

唐の開元年中、呉楚齊魯の間、劫賊あり。近頃は
不景氣だ、と徒黨十餘輩を語らうて盛唐縣の塚原に
至り、数十の塚を發きて金銀寶玉を掠取る。塚の中
に、時の人の白茅家と呼ぶものあり。賊等競うてこ
れを發く。方一丈ばかり掘るに、地中深き處四個の
房閣ありけり。唯見る東の房には、弓繪槍戟を持ち
たる人形あり。南の房には、僧綵錦綺堆し。牌あり
て曰く、周夷王所賜錦三百端と。下に又棚ありて金
銀珠玉を装れり。西の房には漆器あり。蒔繪新なる
ものゝ如し。さて其北の房にこそ、珠以て飾りたる
棺ありけれ。内に一人の玉女あり。出けるが如し。
緑の髪、桂の眉、皓齒恰も河貝を含んで、優美端正
畫と雖も及ぶべからず。紫の二、繡ある鞵、珠の履
をはきて坐しぬ。香氣一脈、芳霞霰黠く。いやな奴
あり。手を以て密と肌に觸るゝに、滑かに白く膩づ
きて、猶暖なるものに似たり。

棺の前に銀樽一個。兇賊等争つてこれを飲むに、
甘く芳しきこと人界に絶す。錦綵寶珠、賊等やがて

意こころのまゝに取出とりだしぬ。さて見るに、玉女たまめくさが左ひだりの手
のくすり指ゆびに小ちひさき玉たまの鑲わを嵌はめたり。其その彫ほりの巧たくみ
なること、世よの人の得えて造つくるべきものにあらず。い
ざや、と此これを扱ぬかんとするに、弛ゆるく柔やわらかに、細ほそく白しろ
くして、然さも抜ぬくこと能あたはず。頭領とうりやう陽知やうち春制しゆんせいして曰いは
く、わい等ら、其それは止よせと。小賊せうぞく肯きかずして、則すなはち刀かたな
を執とつて其その指ゆびを切きつて珠たまを盗ぬすむや、指ゆびより紅くれなゐの血ち
衝つと絲いとの如ごとく進まりぬ。頭領とうりやう面めんを背そむけて曰いはく、於あてに戲いたまし
哉かな。

冢つかを出いでんとするに、矢やあり、蝗いなこの如ごとく飛とぶ。南なん
房ぼうの人形にんぎやうし氏し、矢繼やつき早はやに射いる處ところ、小賊せうぞく皆みな倒たふる。腸やうち知し春ゆん
一人にんのみ命いのちを全まつたことを得えて、取とり得とたる寶貝ほうばい
は盡ことごとくこれを冢つかに返かへす。官くわんも亦また後のちい渠かれを許ゆるしつ。軍ぐん
士しを遣つかはし冢つかを修をさむ。其その時とき銘誌めいしを尋たづぬるに得うること
なく、誰たが冢つかたるを知らずと云いふ。

人妖

晉の少主の時、婦人あり。容色艶麗、一代の佳。而して帶の下空しく兩の足ともに腿よりなし。餘は常人に異なるなかりき。其の父、此の無足婦人を膝行軌に乗せ、自ら推しめぐらして京都の南の方より長安の都に來り、市の中にて、何うぞやを遣る。聚り見るもの、日に數千人を下らず。此の婦、聲よくして唱ふ、哀婉聞くに堪へたり。こゝに於て、はじめは曲巷の其處此處より、やがては華屋、朱門に召されて、其の奥に入らざる處殆ど尠く、彼を召すもの、皆な其の不具にして艶なるを惜みて、金銀衣裳を施す。然るに後年、京城の諸士にして、かの北狄の回文を受けたるもの少からず、事顯はるゝに及びて、官司、其の密使を案討するに、無足の婦人即ち然り、然も奸黨の張本たりき。後送に誅戮せらる、恚の如きもの人妖也。

少年僧

明州の人、柳氏、女あり。優艶にして閑麗なり。
其の女、年はじめて十六。フト病を息ひ、關帝の祠
に禱りて日あらずして癒ゆることを得たり。よつて
錦繡の幡を造り、更に請で願ほどきをなす。祠に
近き處少年の僧あり。豫て聰明をもつて聞ゆ。含春
が姿を見て、愛戀の情に堪へず、柳民の姓を祝願
して、密に帝祠に奉る。其の句に曰く、

江南柳嫩緑。

未成陰攀折。

尚憐枝葉小。

黃鸝飛上力難。

留取得春深。

含春も亦明敏にして、此の句を見て略ば心を知り、
大に當代の淑女振を發揮して、いけすかないとて父
に告ぐ。父や、今士口の野暮的、娘に惚れたりとて
是を公に訴へたり。時に方國二民、眞四角な先生に
て、すなはち明州の刺史たり。忽ち僧を捕へて詰つ

て曰く、汝何の姓ぞ。恐るゝ對て曰く、竺阿彌と
申ますと。方國僧をせめて曰く、汝職分として人の
迷を導くべし。何ぞかへつて自ら色に迷ふことを
なして、佗の女子を愛戀し、剩へ關帝の髯に紅を塗
る。言語道斷ぢやと。既に竹の籠を作らしめ、これ
に盛りて江の中に沈めんとす。而して國こくちん、一偈を
作り汝が流水に歸るを送るべしとて、因て吟じて云
ふ。

かづなんのたけのかうしやう
江南竹巧匠。

むすんでかごをつくるにやこ
結成籠好。

ししにあたへてほつたいをかくす
與吾師藏法體。

へきはぶかきとこちかうりつをとまなひ
碧波深處伴蛟龍。

まさしゝるこれくう
方知色是空。

竺阿彌、めそゝと泣きながら、仰なれば是非も
なし。乞ふ吾が最後の一言を容れよ、と云ふ。國こくちん
何をか云ふ、言はむと欲する處疾く申せ、とある時、

かづなんのつきかゞみのことくまたつりばりのにらこし

江南月如鏡亦如鉤。

まふへくらのほむくわれんのほむり
曲鈞不上畫簾頭。

めいぎやうのぞますつこうふんのませせて
明鏡不臨紅粉面。

むなしくみつからとつりうきてらす
空自關東流。

國こくニ大ちんおほいに笑わらつて、馬ば鹿かめ、おどかしたまでだと。
これを釋ゆるし、且かつ遺俗げんぞくせしめて、柳りう含がん春しゆんを配はいせりと
云いふ。

魅室

唐の開元年中の事とぞ。戸部郡の令史が妻室、美にして才あり。たま／＼鬼魅の憑る處となりて、疾病狂せるが如く、醫療手を盡すといへども此を如何ともすべからず。尤も其の病源を知るものなき也。

令史の家に駿馬あり。無類の逸物なり。恆に一愛矜愛矜して芻秣を倍し、頻に豆を食ましむれども、日に日に瘦疲れて骨立甚だし。擧家これを怪みぬ。

鄰家に道術の士あり。童顔白髪にして年久しく住む。或時談此の事に及べば、道士笑うて曰く、それ馬は、日に行くこと百里にして猶羸るゝを性とす。況や乃、夜行くこと千里に餘る。寧ろ死せざるを怪むのみと。令史驚いて言ふやう、我が此の馬はじめより厩を出さず秘藏せり。又家に騎るべきものなし。何ぞ千里を行くと云ふや。道人の曰く、君常に官に宿直の夜に當りては、奥方必ず斯の馬に乗つて出でらるゝなり。君更に知りたまふまじ。もしいつはりと思はれなば、例の宿直にとて家を出でて、試みに

かへり來て、密かに伺うて見らるべし、と云ふ。

令史、大に怪み、即ち其の詞の如く、宿直の夜潛に歸りて、他所にかくれて妻を伺ふ。初更に至るや、病める妻なやかに起きて、粉黛盛粧都雅を極め、女婢をして件の駿馬を引出させ、鞍を置きて階前より翻然と乗る。女婢其の後に續いて、こはいかに、掃帚に跨り、ハツオウと云つて前後して冉冉として雲に昇り去つて姿を隠す。

令史少からず巔勤して、夜明けて道士の許に到り嗟歎して云ふ、寔に魅のなす業なり。某將是を奈何せむ。道士の曰く、君乞ふ潛にうかゞふこと更に一夕なれ。其の夜令史、堂前の幕の中に潛伏して待つ。二更に至りて、妻例の如く出でむとして、フト婢に問うて曰く、何を以つて此のあたりに生たる人の氣あるや。これを我が國にては人臭いぞと云ふ議なり。婢をして帚に燭し炬の如くにして偏く見せしむ。令史慌て惑ひて、傍にあり合ふ大なる甕の中に匍隠れぬ。須臾して妻はや馬に乗りてゆらりと手綱を搔繰るに、帚は燃したり、婢の乗るべきものなし。遂に

件の甕かめに騎のりて、もこ／＼と天上てんじやうす。令史れいし敢あへて動うごかず、昇のぼること漂々へう／＼として愈々いよ／＼高く、やがて、高山かうざんの頂いたゞきの蔚然うっぜんたる林はやしの間に至あひたる。こゝに翠帳すめぢやうあり。七八群にんむらがり飲のむに、各妻おの／＼つまを帶たいして並び坐ならして睦むつまじきこと限かぎりなし。更かうた闌たけて皆みな分わかれ散ちる時とき、令史れいしが妻つまも馬うまに乗のる。婢こしもとは又また其甕そのかめに乘のりけるが心こころ着ついて叫さけんで曰いはく、甕かめの中なかに人ひとあり。と。蓋ふたを拂はらへば、昏惘こんまうとして令史れいしあり。妻つま、微醉ほろゑひの面おもて、妖艶えうえん無比むひ、令史れいしを見て更さらに驚おどろかず、そんなものはお打棄うつちやりよと。令史れいしを突出つきだし、大勢おほぜい一い所に、あはゝ、おほゝ、と更さらに空中くうちゆうに昇去のぼりきりぬ。令史れいし人間の抜ぬけた事こと夥おびたし。呆あきれて夜よを明あかすに、山深やまふかうして人ひとを見みず。道みちを尋たづぬれば家いへを去さること正まさに八百里りて程い。三十日にちを經へて辛からうじて歸かへる。武者むしやぶり着ついて、これを詰なじるに、妻つま、綾羅りよらにだも堪たへざる状さまして、些ちつとも知らずと云いふ。又實またまことに知らざるが如ごとくなりけり。

良夜

唐の玄宗、南の方に狩す。百官司職皆これに従ふ
中に、王積薪新と云ふもの當時暮の名手なり。同じ
く扈從して行いて蜀道に至り、深谿幽谷の間にして
一軒家に宿借る。其の家、姑と婦嫁と二人のみ。

積薪に夕餉を調へ畢りて夜に入りぬ。一間なる處
に臥さしめ、姑と婦は、二人戸を閉ぢて別に籠りて
寝ねぬ。馴れぬ山家の旅の宿りに積薪夜更けて寐ね
難く、起つて簷に出づ。時恰も良夜。折から一室處
より姑の聲として、婦に云うて曰く、風靜に露白く、
水青く、月清し、一山の松の聲蕭々たり。何うだね、
一石行かうかねと。婦の聲にて、あゝ好いわねえ、
お母さんと云ふ。積薪私に怪む、はてな、此家、納
戸には宵から燈も點けず、わけて二人の女、別々の
室に寝た筈を、何事ぞと耳を澄ます。

婦は先手と見ゆ。曰く、東の五からはじめて南の
九の石と、姑言下に應じて、東の五と南の十二と、
やゝありて婦の聲。西の八ツから南の十へ、姑聊も

猶豫はす、西の九と南の十へ。

恚いかくて互たがひに其その間に考案かうあんする隙ひまありき。さすがに斯道しだうの達人たつじんとて、積薪せきしんは耳みみを澄すまして、密ひそかに其その戦たたかひを聞居きゝゐたり。時とき四更かうに至りて、姑しよの曰いはく、お前まへ、おまけだね、勝かつたが九目もくだけと。あゝ、然さうですね、と婦よめの聾こゑしてやみぬ。

積薪せきしん思おもはず悚然ぞつとして、直たゞちに衣冠いくわんを繕つくろひ、若わかき婦よめは憚はやかりあり、先まづ姑しよの閨なやにゆき、もし／＼と聾こゑを掛かけて、さて、一石願せきねがひませう、と即すなはち嗜たしなむ處ところの囊ふくろより局盤きよくばたひの圖づを出いだし、黒白こくびやくの碁子きしを以もつて姑しよと戦たたかふ。はじめ二目もく三目もくより、本因坊ほんいんぼう膏汗あぶらあせを流ながし、額ひたひに湯煙ゆけむりを立てながら、得えたる秘法ひはふを試こしむるに、僅わずかに十餘子よしを盤ばんに布しくや、忽たちまち敗まけたり。即すなはち踞ひざまついて教をしへを乞こふ。姑しよ微笑ほくゑみて、時ときに起おきて座ざに跪坐つゐあたる婦をんなを顧かへりみて謂いふ、お前まへ教をしへてお上げと。婦よめ、櫛くしまき卷まきにして端坐たんざして、即すなはち攻守こうしゆ奪救だつきう防殺ぼうさつの法はふを示しめす。積薪せきしん習ならひ得えて、將はた天あめが下したに冠くわんたり。

それ、放はなたれたる女をんなは、蜀道しよくだうの良夜りやうきにあり。敢あへて目白めじろの學校がくかうにあらざる也なり。

【完】